

カジカガエル①

兎にも角にも、みなさん「カジカガエル」と検索してその鳴き声を聞いてみてほしい。フィフィフィ…という、およそカエルとは思えないその美声は、**鹿の鳴き声っぽい**ということで“河鹿蛙”という名がついたが、個人的には**鳥の鳴き声っぽい**と思っている。あまりに美しい声だから「清流の歌姫」とも呼ばれ（鳴くのはオスのなので正確には姫ではない）、江戸時代にはカジカガエル専用のカゴを作り飼育するのが流行ったらしい。万葉集に詠まれている蛙（蝦,かはづ）はだいたいが河鹿蛙（カジカガエル）を指すといわれている。

カジカガエルを求めて東京都西部の秋川を訪れた。たしかにカジカガエルの美しい声はするのだが、東京都とは思えない美しい川が広範囲に広がっていて、かえって**広すぎてカエルの姿を見つけれられない**。『ダーウィンがきた』でこのカエルが特集されたときも、裏話として「**撮影に物凄く苦労した**」とあった。カジカガエルは溪流の石の上にいるので、川岸から双眼鏡などで石の上を

探す。アオガエルの仲間とは思えない**グレーの体色かつ平べったい**からだでも見つけにくい。ようやく見つけても、カエルは基本的に警戒心が強いので近づくのが難しい。だから背後から回ったり、ゆっくり近づいたり工夫するのだが、カジカガエルの場合、溪流の中の転石にいるので近づくには**川に入らなければならない**。じゃぶじゃぶするとすぐ逃げる。そろりそろりと近づきつつ、滑る足元に気を取られ下を向く。そして次に顔を上げた時にはカエルはもういない…ガックリ。というのを何度も繰り返した。どうにか近づけたとしても、待てど暮らせど**全然鳴いてくれない！**お前さっきまで鳴いてたやんけー！とヤキモキしながら、川の中で座るわけにもいかず、カメラを持つ手がプルプルし始め、こっちがギブアップ。

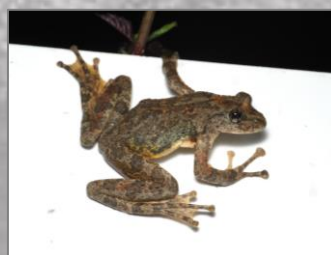
結局、警戒心が弱くなる夜に撮影したのだが、**別問題**が。真っ暗な溪流に一人で行くのは**なかなか怖い**のだ。危ないという意味の怖いではなく、精神的に怖い。獣がいるわけでも、幽霊を信じているわけでもないが、真の暗闇というのはえもいわれぬ恐怖を掻き立てられ、意味もなく何度も後ろを振り返ってしまった。

結局、恐怖心には勝てず、川の近くに街灯があって人通りも少しある場所を探し出し、そこで観察をした。生き物の観察をしているとよく思うが、観察には、その生物の生息地にただ行けばいいのではなく、観察しやすい場所を探すのが重要だ。そういった適地を見つけるには足繁くフィールドに通うしかない。



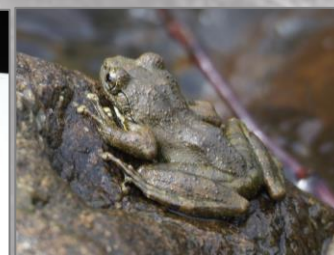
夜、溪流の石の上で鳴くカジカガエルのオス 6月22日

フィフィフィフィ…と、カエルとは思えない美しい鳴き声で鳴く。日中は警戒心が非常に強く、鳴いている姿の撮影は難しい。



おそらくメス

オスよりも明らかに大きい。工事用の白い壁に張り付いていた。オスはたくさんいるがメスの姿を全然見ない。



からだがとても平べったい

伏せてじっとしていると石と同化して見つけるのが大変。



鳴くオス（日中）

かなり遠くからようやく撮れた1枚。日中の鳴く姿はこれが限界。

日中の撮影風景

人が近くにいるとダメなのかと思いカメラを遠隔で操作する方法へ作戦変更。…が、これでも全く鳴かない。近づくと前は鳴いてたのに！

